

バザーリアの理念がマニコミオ（精神病院）と格闘する日本社会を魅了

日本の岩波書店が、『バザーリア講演録 自由こそ治療だ！』（『ブラジル講演（原題）』）を刊行。

精神保健の問題を批判的に考え直すために、日本社会が信頼をおくのがフランコ・バザーリアの著書である。バザーリアの妻フランカ・オンガロとみずからも精神医療改革に参加したマリア・グラツィア・ジャンニケッタが編集した『ブラジル講演（原題）』が、このたび日本に紹介され、岩波書店が『バザーリア講演録 自由こそ治療だ！—イタリア精神保健ことはじめ—』のタイトルで刊行した。岩波書店が出版したバザーリアの精神医療改革に関連する書籍は、本書が3作目にあたる。

『バザーリア講演録』は、すでにポルトガル語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ドイツ語に翻訳されている。本書に収録されているのは、1979年の6月18日から11月21日までの期間に、フランコ・バザーリアがブラジルのサンパウロ、リオデジャネイロ、ベロオリゾンテで行った連続講演の記録である。180号法（世界で初めて公立精神病院の閉鎖を定めた精神保健改革法）が可決された1978年から、ほぼ40年が経過している現在、若い世代にバザーリアの実践と理念を伝えるには、本書は最良の手段といえる。また、こうした改革を志向し、改革の土壌を準備させた動機や取り組みを知らせるといっても、本書は最適な一冊である。

日本の岩波書店が刊行した書籍として、フランコ・バザーリアとイタリアの精神医療改革を扱ったものは、『バザーリア講演録』が第3作目である。第1作目は『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』（2009年発行）であり、著者の大熊一夫はジャーナリスト、2008年には彼はバザーリア賞を受賞している。同書はバザーリアの改革を日本に広く紹介した最初の書物である。

第2作目が『精神病院のない社会をめざして バザーリア伝』（鈴木鉄忠、大内紀彦訳 2016年発行）、原題は『バザーリア伝』である。原著者の一人は元トリエステ県代表で、バザーリアと並んでマニコミオ（精神病院）改革の立役者だったミケーレ・ザネッティ、もう一方の著者がジャーナリストのフランチェスコ・バルメジャーニである。そして、第3作目が、『ブラジル講演（原題）』を日本語に翻訳した『バザーリア講演録』（大熊一夫、大内紀彦、鈴木鉄忠、梶原徹訳）である。4名の訳者のうち鈴木鉄忠と大内紀彦の二人の研究者は、長きにわたってトリエステに滞在した経験があり、バザーリアが行った改革の成果にじかに触れるとともに、改革の立役者たちとも直接知り合う機会を得た。

バザーリアの著作の日本への翻訳紹介は、鈴木と大内の二人にとってある種の使命となった。イタリアの精神保健制度に関連する先進的な改革を紹介することにより、日本の精神医療に刺激を与える具体的な事例を提供したい、また世界を見渡してみると、実際のところ日本の精神医療は「異常」と言わざるをえない状況にある、そう二人は述べている。

近年の30年ほどを見てみると、世界のすべての先進国で精神病院の病床数は減少している。そのなかの例外が日本であり、日本には人口約1億3千万人に対して30万床を超える病床が残されている。そして、その30万床のうちの9割が、私立病院に設置されている。病院の利益は、心病む患者たちによってもたらされているのである。病院の利益は、患者の数に直接比例しているので、そこにはベッドはいつも患者で埋まっていなければならない、という理屈が生まれてくる。そして、アルツハイマーの患者や高齢者たちによってベッドが埋められる、ということもしばしば起きている。

日本社会において、精神保健とは「閉ざされた扉」のことである、という状況はいまだに変わっていない。地方行政の消極さと私立病院のあからさまな抵抗は、まさしく共犯関係といえる。

「精神病院を廃止し、心病む人々を中心に据えた地域精神保健サービス体制を築こうとするバザーリアと同志たちの取り組みは、1960年代から70年代にかけて、イタリア国内だけでなく、様々な国々で大きな注目を集めていた」と『バザーリア講演録』の“訳者あとがき”には記されている。その当時、熱に浮かされたように、バザーリアは講演で世界を飛び回っていた。ブラジル講演は、そうした時期に行われたものである。

『バザーリア講演録』は、バザーリアがみずからの言葉で自身の思想と実践とを語った遺言書ともいえる。なぜなら、この連続講演が行われた翌年の1980年、バザーリアは脳腫瘍により、56歳という若さでこの世を去ったからである。ブラジルで行われた連続講演のなかで、バザーリアが行った聴衆の質問への返答は、絶妙な切り返しやユーモアに満ち、彼の人間的な魅力が溢れている。

バザーリアは、講演会のなかで、「理性の悲観主義」に対して「実践の楽観主義」というビジョンを打ち出しているが、これは時代を超えて通用するメッセージである、と訳者は述べている。一人ひとりが、それぞれに与えられた具体的な役割に貢献し続けながら、希望を見出していこうとバザーリアは訴えている。それこそが不可能を可能にする秘訣である、というのがバザーリアが生涯を通じて行った証言である。